

正答率と無回答率との相関からの一考察

～全国学力・学習状況調査・みえスタディチェックの結果から～

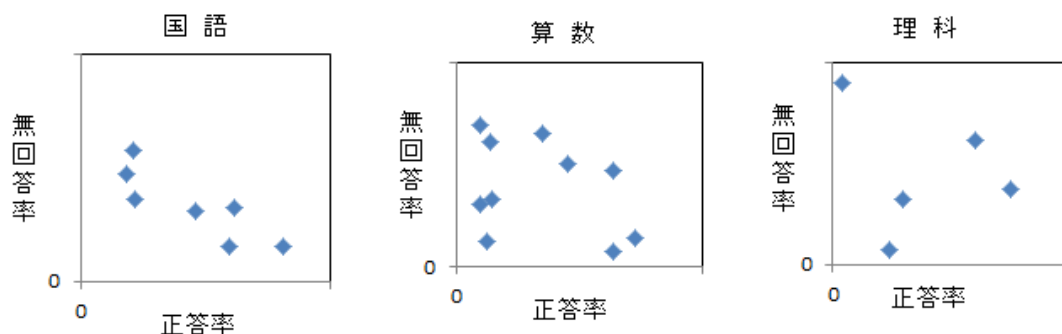
1 はじめに

本年度(平成28年度)は、4月19日、6年生対象に全国学力・学習状況調査(以下、全国学調と表記)が、4年生5年生対象に“みえスタディチェック”(以下、スタディチェックと表記)が実施され、本校でも自校で採点し、結果の分析を行った。ここでは正答率と無回答率に着目し、すべての教科・問題(全国学調:国語A・B、算数A・B スタディチェック:国語、算数、理科)の記述式問題について、正答率と無回答率の相関関係とその分布の状況から考察した。

2 分析

「難しい問題は答えられない。回答できない。」であり、その結果、「難しい問題は正答率が低くなり、無回答率が高くなる。」ことになる。正答率の低い問題は、難しい問題であるため、無回答率が高くなる。正答率の高い問題は、やさしい問題であり、無回答率が低くなる。つまり、正答率と無回答率は負の相関関係になる。本校の全国学調・スタディチェックの結果が同様になっているか調査した。

国語は正答率と無回答率には強い負の相関関係にある。正答率の低い問題は難しい問題で無回答率が高くなっている。算数は弱い負の相関関係にある。グラフをみると、なんとなく右下がりになっているが、分布が下の方に広がっている。つまり、正答率の低い難しい問題でも、無回答率が低い問題がある。理科についても同様である。全ての教科で調べてみると、負の相関があり、ここでは示してはならないが、分布が下に広がっている。



相関係数 国語: -0.85 (強い相関がある) 算数: -0.34 (弱い相関がある)
理科: -0.23 (弱い相関がある) 全ての教科: -0.41 (相関がある)

3 考察

それぞれのテストを開始する前に、担任から「たとえ正解が分からなくても、分かるところまで書きましょう。できるところまで書きましょう。」と指導した。子どもたちは担任のその指導によく従い、分かるところまで、できるところまで頑張った結果、正答率の低い問題でも、無回答率が低くなったと考えられる。

4 おわりに

本校の子どもたちはたいへん素直である。その素直さが今回の分析で改めて明らかとなった。この素直なところを強みとして、教育活動をさらに充実させ、生きる力を育てていきたい。